

地域の文化的資料の集積・活用について
— タウン誌『スペース』の編集資料等を事例に —

岡村 知子・安藤 隆一・佐藤 絃一

Accumulating and Utilizing Documents of Regional Cultures :
With Special Reference to Editorial Resources of the Town Magazine *Space*

OKAMURA Tomoko, ANDOU Ryuuichi, SATOU Kouichi

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第18巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.18 / No.2

令和3年12月15日発行 December 15, 2021

地域の文化的資料の集積・活用について

—タウン誌『スペース』の編集資料等を事例に—

岡村知子*・安藤隆一**・佐藤紘一***

Accumulating and Utilizing Documents of Regional Cultures:
With Special Reference to Editorial Resources of the Town Magazine *Space*

OKAMURA Tomoko*, ANDOU Ryuichi**, SATOU Kouichi***

キーワード：タウン誌，地域の文化的資料，図書館

Key Words: Town Magazine, Documents of Regional Cultures, Library

1. はじめに

タウン誌『スペース』(創刊時の名称は『まちの本スペース』である。その後様々に名称を変えたが、本論では「タウン誌『スペース』と表記する。)は、1978年～1997年の20年間にわたって、主として鳥取県東部地域を対象エリアに発行されてきた。その概要については、岡村知子・安藤隆一「鳥取のタウン誌『スペース』をめぐる一考察」(『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』(第15巻第1号 鳥取大学地域学部 2018年10月)に詳しい。

当タウン誌の直接の研究については、その時々編集人や発行人であった筆者も協力し、本稿の共同執筆者の岡村知子によって行われている。そして、その成果は岡村が担当する「日本近代文学形成論」(2017年度後期)の授業全体で発表されている。

この授業のシラバスの「授業の目的と概要」は「本稿では、鳥取のタウン誌『スペース』(1978年12月創刊)を分析対象とする。主要な書き手の連載記事を読み込むと同時に、無署名の多彩な記事にも目配りすることで、80年代の鳥取における文化形成の現場を迫体験し、現代社会における情報の発信・受容のあり方について再考することを目的とする」としている。

さらに、2019年2月1日から28日かけて、鳥取大学附属図書館(以下、「附属図書館」という。)お

よび同大学コミュニティ・デザイン・ラボ(以下、「CDL」という。)において、「タウン誌『スペース』とその書き手・徳永進～本とその資料展～」(主催：同展実行委員会)(以下、「スペース展」という。)が開催された。

スペース展では、「タウン誌『スペース』を語る」というトークサロンも開催され、元朝日新聞鳥取支局の鈴木暁彦(現長崎県立大学教授)らが講演を行った。

タウン誌『スペース』はまさに地域の文化活動であり、その成果を地域に還元するために、地域の文化の拠点である鳥取県立図書館(以下、「県立図書館」という。)でスペース展(共催：県立図書館)を開催することにした。

県立図書館におけるスペース展では、鳥取大学での展示に加え、県立図書館に所蔵されている関連図書も展示した。さらに、連携イベントとして、県立図書館横の中庭において、一箱古本市(第2回トトリヒトハコ)、知のカフェ(第11回)も開催された。

こうした動きを受けて、スペース展に展示された資料や旧スペース事務所として使用された建物の取り壊しに伴う『スペース』の編集や営業などの関係資料をどうするかという問題が生じてきた。

この問題は、地域での民間の文化活動によって蓄

*鳥取大学地域学部地域学科国際地域文化コース・准教授

**元鳥取県立公文書館長

***鳥取県立図書館郷土資料課学芸員

積された「地域の知恵」とでもいうべきものが失われ、その後の学問的研究や「地域の文化活動」に寄与する財産の減少を意味するからである。

幸いにして、今回、タウン誌『スペース』については、その現存する全資料が、(タウン誌『スペース』全136号の殆どがすでに所蔵されており、かつ、スペース展の共催機関である)県立図書館に寄贈され、所蔵されることになり、今後の研究や地域の文化活動に活用されることになった。

本稿は、タウン誌『スペース』の講義から資料所蔵までのこうした一連の動きを報告するものである。執筆に際しては、Iは安藤隆一、II、IIIは岡村知子、IVは安藤隆一、佐藤紘一、Vは佐藤紘一が担当した。



『スペース』事務所
(撮影：安藤 2021年9月21日)

(安藤隆一)

II. 『スペース』掲載記事を教材とした授業

2017年度後期の「日本近代文学形成論」(3・4年生対象)では、『スペース』に掲載された諸作品を教材として取り上げた。ガイダンスでは、同誌の刊行が、鳥取の地に見られる二つの特徴——「城下町主義」(行政と市民の相互依存体質)と「都会ものまね主義」⁽¹⁾——を仮想敵として、「声なき声」のメディアを確保する⁽²⁾べく、編集長・専属スタッフ不在の「手弁当」⁽³⁾の活動として始められたことを確認し、以降、初期の主要な書き手であった徳永進・濱崎洋三・山中螢児(本名：太田満明)の作品を中心に考察した。

2～5回では、徳永進が過去を回想した文章を時系列に並べて紹介し(次章に徳永の略年譜掲載)、そこに記された経験が、『スペース』掲載のエッセイに生かされていることを確認した。徳永は、小中学生時代の入院経験から、個人の自由を抑圧する側面をもつ「家や村やまち」が、「一度病んだ者から見れば、

本質的に温かなやすらぎの場として映る」ことに気がついたと言い⁽⁴⁾、大学時代には、大学闘争から脱落した体験を通じて、「自分の内面」に巣食う「悪」から目を背け、「機動隊を悪と決めつける」「正義」の危うさを知ったと言う⁽⁵⁾。これらの経験は、『スペース』掲載記事において、「本来多種のものをかかえこまざるをえないしかかえる力を持っている」⁽⁶⁾空間として村や街を捉え、そこで出会った「看板かつぎの宣伝マン」⁽⁷⁾、魚の行商や「ヌード劇場の呼び屋」をして生計を立ててきた女性たち⁽⁸⁾を、「その時々の人々の心や作為がこの人の生き方の中に映し出される」「鏡のような」⁽⁹⁾存在として尊重する態度へとつながっている(この授業に際し、徳永に実施したインタビューの内容を次章に挙げているので、参照されたい)。

6～9回で取り上げた濱崎洋三(1936～1996年)は、京都大学文学部史学科卒業後、鳥取西高校教諭となり、鳥取藩史・鳥取県史・鳥取市史の編纂に携わるとともに、鳥取県立公文書館長、鳥取県立図書館長を歴任した人物である。濱崎が『スペース』に連載した「地方史研究雑感」の1回目では、「出版社や新聞社の注文に追まわられて、つぎつぎと消費文化のための歴史書が量産されている」現状に対し、江戸時代に『鳥府志』等の優れた著作を著した岡嶋正義のように、「他人に読まれることを直接の目的とはしない」研究態度の重要性が説かれている⁽¹⁰⁾。「原典史料の中から自分自身の発想を生み出すのではなく、流行中の他人が設定した理論に従って、史料をただその理論援助のためにのみ利用」すれば、「事実を歪曲し、庶民的日常性を無視するという暴力がまかり通」ると警鐘を鳴らす⁽¹¹⁾。

また歴史学者には、「過去と現代という時間を異にする両時代についての知識」が求められるが、特に現代についての理解がなければ、歴史研究は「単なる骨董趣味に陥ってしまう」として⁽¹²⁾、「今の自分にとって過去の事実がどういう意味を持つのか、その問いかけが極めて重要である。」と述べている⁽¹³⁾。いずれの記事も、これから卒業研究に取り組もうとする受講生にとって、分野を問わず、アカデミズムの本質を伝えるものであったと考える。

10～13回で取り上げた山中螢児(1951年～)は、山陰中央新報社の記者として活躍しながら、80～90年代にかけて、主として鳥取の文芸同人誌『断層』に小説を発表した。『スペース』には、紙面上唯一となる小説「黒い花火」を2回分連載し、中絶となっ

ている⁽¹⁴⁾。1990年代後半という近未来に、創立5周年を迎える「国家防衛軍」が中近東に派兵され、それに反対する一部の国民がゲリラ隊を組織すると、国民に対する監視を強化すべく、国防軍内に保安部が設置された。主人公「明男」は、勤務先の小出版社・「現代日本社」の倒産と同時に送られて来た「義勇軍招請状」(無職であったり、長男でない男性が優先的に徴兵される。)を無視し、鳥取市を想起させる「砂浜の地方都市」に赴く。そこで気心の知れた仲間たちとともに、「自由の戦士」という反戦組織の活動に身を投じていくことが暗示される物語である。

授業当時は、民意を蔑ろにした「平和安全法制」の成立を目の当たりにした直後でもあり、およそ35年前に執筆された小説の先見性に驚かされるとともに、現代の読者がこの作品をいかに受けとめるべきかについて考えさせられた。また連載1回目には、徳永のエッセイに描かれた「トロ箱のおばさん」⁽¹⁵⁾をモデルとした「およしさん」という女性が、反戦ゲリラ組織の連絡係として登場するため、同一メディアに表現された異質な作品世界がリンクする面白さにも触れることができた。併せて、山中が『断層』に発表した「戦争もの」⁽¹⁶⁾や、ダウン症の娘をもつ父親を主人公とする連載作品⁽¹⁷⁾の本文も紹介した。

最後に、1978年から91年にかけて、鳥取県庁に勤務しながら『スペース』の編集に携わった安藤隆一に、ご登壇いただいた。山口昌男『学問の春』(平凡社新書 2009年8月)や井上ひさし『ボローニヤ紀行』(文藝春秋 2008年3月)を参考文献として挙げながら、大学という場の起源に遡り、学生の内発的学びの必要性を語り、学際性を標榜する地域学においてこそ、各分野の「深い研究」が重要であることを強調された。また学生から質問として挙げられた、『スペース』創刊という行動を起こしたきっかけや継続の苦勞、タウン誌を作る上で大切にすべきものや注意すべきことについて、綺麗事を排して答えていただいた。

本講義は、授業者が文学的価値を感じる記事のみを取り上げた一面的なものにすぎないが、受講生は、自身が生まれる前の社会のありようを追体験し、現在との落差や共通性に思い至ることができたようだ。

(岡村知子)

Ⅲ. 初期『スペース』の書き手・徳永進インタビュー

本章は、2017年10月10日、および2019年1月

8日に行った、徳永進氏へのインタビューを文字に起こしたものである。前者は「日本近代文学形成論」の授業(2017年度後期)で、『スペース』に掲載された徳永氏の記事を取り上げるにあたり、後者は「タウン誌『スペース』とその書き手・徳永進～本とその資料展～」(2019年2月1～28日 於・鳥取大学附属図書館)を開催するにあたって実施した。安藤隆一と岡村知子が聞き手となり、岡村が注を付した。野の花診療所での多忙を極める診察の合間に、徳永氏が鳥取方言を用いて持論を語った貴重な記録である。

《徳永進 略年譜》

- ・1948年、徳永^{つねお}職男、美枝子の三男として、鳥取県八頭郡郡家町に生まれる。
- ・1957年、郡家町から鳥取市内に転居。
- ・鳥取大学付属小学校・中学校、鳥取県立鳥取西高校卒業。
- ・1968年、京都大学医学部入学。FIWC(フレンズ・インターナショナル・ワーク・キャンプ)に参加し、大倭紫陽花邑(奈良市大倭^{むすび})に建設された、「らい恢復者社会復帰センター 交流の家」を手伝う。
- ・1971年、鳥取県八頭郡八頭町姫路に家を借り、同志とともに「私^{きさいちむら}都村」の建設を試みる。
- ・1974年、京都大学医学部卒業。
- ・京都国立病院、大阪吹田の同和地区診療所を経て、1978年、鳥取赤十字病院の内科医となる。
- ・1982年、『死の中の笑み』(ゆみる出版 1982年2月)が、第4回講談社ノンフィクション賞受賞。
- ・1988年、鳥取市湯所町に、セミナーハウス「こぶし館」を建設。
- ・1992年、独自の信念に基づいて地域医療に取り組む人に贈られる、若月賞の第1回受賞者となる。
- ・2001年、鳥取市行徳に、ホスピスケアのある19床の有床診療所「野の花診療所」を開院。
- ・2002年より、在宅ホスピスを開始。

《2017年10月10日》

岡村 患者さんとのエピソードを文章にされるときに、意識されていることはどのようなことですか。

安藤 例えば、患者のプライバシーに触れる場合はどうなんですか。

徳永 プライバシーは勝負なんですね。だから、ドンパチはもちろんあります。プライバシーに入って負けたら負けだし、それを許可できるやりとりがあ

れば、許される。「お目こぼし」という言葉がありますが、そんな感じの勝負なんですね。7勝3敗ぐらいかな。

安藤 先生でも、3敗もあるんですね。

徳永 ありますわ、それは。だけど、ちょっとこっちが有利なのは、やはり場面が有利でしょう、医師というね。だから患者さんはちょっと言いにくいとか、遠慮があります。

もう一つは、そのときの「雰囲気」「気配」というのがあるんですね。患者のことを綴っているみたいだけど、本当はその時の病室の「気配」を伝えている。ああ言った、こう言った、弱って、死んで、みんながワーッと泣いたとか、「ありがとう」と言ったみたいなのは言葉の形で、言葉だけでは、その全体の雰囲気を描き切れんです。みんながギャツと思っ、ウツとするぐらいのところはしれた出来事で、それを包んでいる出来事をそのまま書き切れぬ。

「これで人が亡くなるわな」ということを全然考えていないわけではないですけども、泣くにはもう飽きとって。この「死」という現象について、周りでみんながいろいろ思っている。そういう、言葉として表現される以外のものがありますが、そこに惹かれます。亡くなる人がおって、言葉が話されんで、辛い格好で生命が終わるとい、そういう出来事を包む空気、「気配」という言葉が一番適切だと思うんだけど、ああいうものがどうやったら届くだろうかと思ひます。それはいまだにかなわぬ、というようなものです。

病室をどれだけちゃんと想像させるかということ言えば、できていません。実務者としての日々の綴り方ですから、それ以上のものは、文学者が表現する部分で、そんなのはいたずらにしないほうが素直でいいし、できるわけないので、現実だけは綴るとい、のをぎりぎり続けています。

それに、意外と「お涙ちょうだいシリーズ」は飽きますわ。でも、そういうことを超えて次の出来事が起こっている。その現象が10までであるとすると、6ぐらいの書けないものが残ったままだけれども、4までの範囲でも、驚くことがようけ(沢山)あるわけ、次々に。

もちろん人が違うし、病気が違うし、家族構成、家族の悩み、経過、全部違いますもんね。出自から始まり、いろいろなものを抱えて、みんなが来られますし、家族間の葛藤もあるし、その都度、ある意味では「おっと！」みたいなことがあるので書ける

のですけどね。

現場にはパチャー、パチャーという荒波や風、いろいろな海があつて、70歳を過ぎて、普通なら定年なので「もう辞めようか」と思ふこともあり、辞めてもいいのですが、年取った漁師が「もう辞めろ」と言われても海に出るような感じなんですよ、出来事の力によって。

安藤 「医療」と「書く」行為の関係はどうなんですか。

徳永 「医療」と「書く」、それはちょっと難しいことですが、最初の本は『死の中の笑み』⁽¹⁸⁾でした。松下竜一さん⁽¹⁹⁾と一緒に、講談社ノンフィクション賞⁽²⁰⁾をあげると言われたときに、これだけ毎日が大変だけれん、もらって当然だろうで、「はい、もらいます！」と言ったんですけどね。受賞の挨拶のときに、私は「書ける現場に居続けることでしか、自分には書けないので、そういう現場に居続けたいと思ひます」という言い方をしたのです。それに対して、松下竜一さんは、「自分は書くことが仕事なので、食うために書き続けます」とおっしゃった。書く姿勢が全然違つていて、私は現場のびっくりしたことを書こう、それだけだったのです。竜一さんにおける「書く」ことの深さがさすがだと思ひました。

書くことと医者であることは同じかと問われたんだけど、ちょっと最近はそのへんの意欲が落ちてい、るのですが、前は「これは書ける」とい、うことを感じる装置があつた。今はそれが抜けとって、せつかくの現場なのに書き忘れる日々です。

安藤 もう年だしね(全員大笑い)。今日の講義で鶴見俊輔⁽²¹⁾の話をするのですが、徳永進における鶴見の位置について教えてください。

徳永 鶴見さんは「正義」や「主義」とい、うのは、あまり好きではなかつたです。それらの名の下に、多くの人処刑されたわけですから、そういうものから距離を置きたいとい、う考えがあつたのです。その代わりに、「態度とい、う思想」⁽²²⁾とい、う言葉を使ひました。柏木義円⁽²³⁾とい、う思想家が、「反戦」と言わずに「非戦」とい、う言葉を提起したのですが、「戦争はよくない」と言ふと「アカ」だとして逮捕されるような時代に、近所の奥さんたちから意外と人気があつたとい、うのです。

その理由は、柏木義円が朝早く起きて、箒で枯葉を掃くところをみんなが見ていて、「あの人の言ふこと、難しくてよくわからんけど、ええ人だ」と言

い合ったから。ここに現れている、「態度という思想」が心に残っていて。さっき年だと言われたけど、年なので現場を去ると、現場という一つの態度が示せなくなる。ホスピス、診療所のキャッチコピーではなく、「おまえ、ちゃんと朝起きて、亡くなる人のところに行っとるか」みたいな態度ですね。それを貫けているかということのチェックをしてくれるのが、自分の中では鶴見さんなんです。鶴見さんにこのことは言えるか、見せられるか。なので、どこかで見られている。あの人が認めないだろうと思うことは、自分はできないなというのがあるんですね。診療所の看板を書いてもらったのも鶴見さんだけだね。



野の花診療所の看板

(撮影：安藤 2017年10月10日)

それからもう一つ、「不定形の思想」⁽²⁴⁾。「形はそのときどきに作られていくしかない」という意味です。「人間はこうあらねばならん」などとは絶対に言わなくて、「悪がある」と言うのですね。普通「悪」というとネガティブに捉えられますが、あの人は「誰の内にも外にも悪はある」と言って、「悪はいけませんね」みたいなことで終わらないのです。その悪を抱えて、どうやって悪のままいくのか、あるいは悪が変わるのかですが。

ホスピスケアをやっている、患者さん一人一人にどんな道ができるかは予測が付きません。最初から「こういくんですよ」というので、癌を告知し、痛み止めを使い、家族ケアがあって、受容して、それで死にたどり着いて、死のあとにはスピリチュアルがあって、というような絵を描くと、偽りの図がいくらでもできるのですね。鶴見さんは、偽りの図に真実はないということを大前提とされていました。

そのときどきの勝負で、こっちが悪になったりもするし、ふっと思いがけん道ができて許されたり、いろんなことがあるもんでね。だからもう、一つのスポーツなんですね。例えばサッカーみたいだったり。球が来たら誰かが蹴って、1人で蹴ってゴール

まで行ったらいけんときはボンと渡して、看護師さんがポーンと蹴りながら、ボンボンと渡して、入るか入らないか分からんけれども繋いでいくというスポーツと、よく似ているのですね。

医療活動自体も、スポーツだと考えると分かりやすいのですね。球はポーンと来る、いろいろな患者さんという球が。「えっ」と思いながら、この球をどうしようとみんなで話し合っ

知的障害、身体障害、精神障害がある患者さんの死というのは、意外とうまくいくことが多いんです。それに対して、物事をきっちり理解して、何冊も本を読んでいる人が最期を迎えるときは、非常に難しくなるのですね。「他に治療はないのか」とか、様々なことが「理」からくるので、理性で死に向かっていかれるときは難しくなるのですが、それも勝負なので。

ところが今日は、知的障害のあった患者さんのお母さんとお父さんが挨拶に来られました。その子は、障害のためにみんなにいじめられて、学校を卒業した後は、障害者雇用をしないといけないというので、企業がいやいや雇う。メンバーになると、職場の人から「あの人はあの法律で入っとるだでな」みたいに言われて、うまくいかん。結局、田舎で新聞配達をするのです。16年間頑張る中で、医者が嫌いでも不調をほっといたうちに、癌が大きくなり、それでも人に見せたくない。みんな「あほうだ」と言うけれども、私は立派だと感じます。検診も受けし、早期でそれに向かおうとせず、末期で来られるかたは、尊い人が多いです。

彼女もここで過ごすのですが、腸が動かぬのかにかゆが食べたかったんですね。ある日、お父さんとお母さんが、「今日死なれたら困る。村中、糞摺りだ、先生、もうちょっと生かしたって」と言って来られた。生かして、お米ができれば、新米のおかゆを食べさせたいとおっしゃって。腸閉塞になつてから、食べたらいけんですけど、食べられました。

そして次に、「なんか食べたいもんは？」と聞くと、「カツ丼！」と言ったんですよ。「カツ丼か！」と思って、武蔵屋⁽²⁵⁾というところへ行ったわけです。武蔵屋のカツ丼、昔から確かにうまかったから。カツ丼と言えば、玉葱と玉子であえたものが一般的ですが、武蔵屋のカツ丼はケチャップソースで味付けされていることを忘れとった。彼女はぱっと一口食べて「いらん！」と言った(笑)。それで失敗するわけ。いつもヒットは打てんわけよ。まあ、10打数3

安打ぐらい。

亡くなろうという時に、「鎮静」という、痛みを和らげる薬を使うかどうかについて、「かわいそうなけ、それしたってな」という家族に対し、看護師たちは「先生、それ、するんですか」と躊躇しました。言葉を発しない人は、看護師さんに人気があるんですよ。理にかなったことをいろいろ言う人は、受け止めなければいけないと思いつつ、やや苦手になるんですね。鎮静するには、本人の意思を確認し、家族と看護師さんとお医者さんと、例えば市民で言うと弁護士さんのようなかたが「それでいきましょう」と言って決めます。安楽死ではないのですけどね。

私も多くの患者さんの場合は、積極的に「鎮静しましょう」と言うけど、彼女のときは「もうちょっと生きとってほしいな」という欲が出て。でも「かわいそうで、しょう」とみんなで決心しました。

「いい子でした、ほんに。こっちのほうが教えられました」とご両親が言って、「よしよし、ええとこ、分かるとるな」と思ったのですけどね。

なかなか死なれんかったんですよ。人によって差があって、もうそろそろ離陸されて旅立ちしたほうがいいと思うけれども、なかなか。これも現場のジレンマで、だからなかなかやめられんですけれど。書いたとおりにはいかない、ストーリーの展開にどうやってついていくか。

みんなでお別れする時に、歌を歌ったんですよ。「夕空晴れて 秋風吹き 月影落ちて 鈴虫鳴く 思えば遠し 故郷の空 ああ わが父母 いかにおわす」⁽²⁶⁾。お父さんとお母さんを置いて自分は死ぬわけなので、あの歌詞いいなと思って、みんなで歌ったんですね。お父さんもお母さんも、「ここに来てから救われましたわ」と言われました。いつもそんなじゃないんだけど、たまたま知的障害があったために、そういう流れになったんです。

村の葬式がまだできるころなので、お寺の和尚さんから、「苦しまれん最期を送っておられますな、ええ顔ですわ」と言われて嬉しかったですと言って、その子の若い、綺麗なときの写真をお母さんがわざわざ持ってきてくれました。私は想像できとったんで、見んでも分かっとったのですけれど、お母さんは「こんなきれいな子なんですよ」って見せたかったんですね。

そんなふうにして、みんなが「ああ、よかったな」と思える死も片方にはあるけれど、そればかりではない中におけるもので、ちょうどバランスがいいん

ですよ。そんなんばかりで褒めたたえられとったら、まあ、ほんなもんはないわなって。不定形、すなわち決まった形にはならんで、わっとこちに行ったり、あっちに行つて「あ、ごめん」みたいなことがあったり、具体的には言えんけど、これが3割(笑)。それで、まあ、続けられ得るといふか。

安藤 先生は講演の時などに、歌を歌われる事が多いですが・・・。

徳永 歌うな。

安藤 あれ、なんでですか。

徳永 ハモニカやったな。

安藤 うん。今でも説明しながら歌う。

徳永 意外と、ああいう短い詩とか曲はね、人間の感情がぼわっと入って、「そうだ」って一致するときがあるから。

だいぶ前だけれど、在日朝鮮人二世のかたが、余命を知らされて名古屋の家に帰る途中に、ここに寄ったことがあるんです。残り1週間の命だったんですけど。お父さんは、日本軍が攻めてくるときに反日のグループを作って抵抗した、抗日戦線のメンバーだったんです。そのお父さんが、「この子は河合塾の先生だったけど、三世の出来の悪い子を、仕事の後にただで教えてやったりして、我が家の誇りであると同時に、民族の誇りでもある。」と息子が死んだ時に言ったんです。

近親者の死に際して、これだけしゃべれる日本人はあまりいなくて、「うーん、死んだんか」、こればかりが多いのに、これぐらい言えるというのはたいしたものだなと思いました。お別れをやったときに、お母さんはチマチョゴリを持ってきて、お父さんは歌を歌いたいのと言ったんです。加藤登紀子さんが歌った「鳳仙花」という歌⁽²⁷⁾で、自分たち抗日戦線のみんなが歌った歌だと。

「赤いほうせん花 お庭に咲いたよ 灼けつく夏の日 暑さも知らずに かわいい娘は 爪先染めたよ」「赤いほうせん花 お庭に咲いたよ やがて夏去り 秋風吹けば ほうせん花種蒔け 遠くへはじけよ」

その人の精神は死んでしまうけども、在日の子たちを愛して教育したようなスピリットが、種となって広がれというメッセージを原語で歌ったもので、まさにパチッと合うわけ。

目の前の場面を知った上で作られた歌じゃないんだけど、歌によって通じていく場面っていっぱいある。曲や歌は、現場を超えた普遍性を持っているこ

とが多くて、そこにたどり着くのに、ちょっと使わせてもらおうわけ。なぜ歌うか、なぜハモニカを吹くかというと、心に入ってきたものとシンクロナイズするため。やらせでもあるんですけどね（笑）。

安藤 言葉で伝え得る以上のものが歌にはあると。

徳永 あった。その記憶が残っている。

安藤 先生、歌、上手だしな。

徳永 いや、全然。日々忘れちゃうんだけど、朝昼晩、今言ったようなことに出会っちゃあ、看護師に怒られて。

安藤 書き止める。

徳永 いや、書き止めるのを忘れて、ダラダラと生きてる。『スペース』で、街の友人たちについて連載させてもらった頃はよかったですね⁽²⁸⁾。

《2019年1月8日》

安藤 40年前に『スペース』に書いた記事を今読んで、何を感じますか。

徳永 やっぱりね、変な言い方ですけど、時代が違いますが一。簡単に言うと、コンビニがない時代だったです（笑）。コンビニが悪いという意味じゃないんだけど、みんな基本的に貧しさがあった。

（当時の）『スペース』に書かせていただいた人は、みんな貧しさや、戦争、地震といった、あつて欲しくないもののすべてを経験したような人たちなんですよね。そうすると、話す言葉がみんな、地についている。涙を含めて、脳じゃなくて身体から出るので表現し、一回一回の食事も切実で、浮いていない。工業化、近代化されておらず、大げさな言葉で言えば、大地に根差した人たち。今の日本は近代国家ですけど、この人たちは、ある意味じゃ、アジア的なもの、あるいはアフリカ的なものに根差していて、人間というよりは動物で、ゴリラとかオランウータンのような、ヒト類に所属している感じなんです。

でも、いまや、そういう人を訪ね歩こうと思っても、みんなコンビニ経験者なので、言葉が地についておらず、つくられた言葉話を話している。言葉がスマホ言葉というか、IT言葉になっていくと、皮膚感覚で直にものを感じるから遠のいていきます。

『スペース』に書かせてもらった人たちは、全員重要な登場人物で、物事を教えてもらったし、話す内容もおもしろいし、声の音と抑揚がつくられものじゃなかった。

「ボーっと生きてんじゃねーよ！」、あれ、なかなか

かおもしろいですね。チョコちゃん⁽²⁹⁾がウケてるのは、近代の中で、近代語だけれども、ちょっと原始言葉に近い言葉を発するからでしょう。

安藤 『スペース』に登場する方々は、先生の友達だったのですか。

徳永 友達というか、人生の導き人でもあるし、「普通」の人とは）仲間になれん人で、厳しい世界をみんな生きとって。1人は農業労働者で、1人はストリップの呼び込みだし、1人はおもちゃ屋で風船や飛行機や花火を売ってる人だし、1人は知的障害者、宣伝の看板を肩に掛けて回っていた人です。職業的にはバラエティに富んでいて、社会的な評価としては決して「立派」ではないけれども、人間の味と言うとみんなちゃんとダシが出る感じで、こんな人間にはなかなかない。今、私たちが努力をしても。それは、貧しさから遠ざかり、あつてはならない戦争から遠ざかったからです。

それから、骨格がしっかりしていて、体で生きています。私らは、なかなか体で生きんようになっちゃってるね。知性、教養がないくせに、なので生きる社会になってきた（笑）。テレビで「これがいいです」と言ったら、急にスーパーのなんとか油がなくなりますが。みんなが何か言ってもらって、それに合わせていくというような感じですね。

昔の人らがよかったというわけではなく、現代の生活に憧れる部分もあると思うのです。今テレビで一生懸命、健康について言ってることは、（当時は）報じられなくてもやむを得ずやっておられた部分がある。きっとおいしいものも食いたかったし、ケーキもまんじゅうも欲しかったと思うので、「何を言いよんで、今のほうがいい」って、きっとおっしゃると思うんですけどね。でも違う魅力がありましたね。

安藤 この人たちは患者さんではなかったんですね。

徳永 全然ない（笑）。途中で患者になる人がありましたけど。

安藤 患者さんとの関係は、今のお話みたいな関係ですか。

徳永 患者さんとの関係も難しくなりましたね。以前は、食うことや、ひる（排泄する）こと、歩くことに対して、年を取ると「もういけませんわ」という感覚があった。今は、老いても白内障の手術をすとか、骨粗しょう症の薬を飲みましようとか、アンチエイジングと言って、老いることを抑えようとします。しかしこの人らは、アンチじゃなくて、「あー、もう年取りましたけどな、もう」と言って、受

容しているというか、自然なままだった。昔はだいたいみんなそうだった。

日本では特にアンチエイジングの傾向が強くなって、老いを受け入れがたい。その人たちは、老いも受け入れましたし、死ぬということも、今ほどにあってはならないことにはしなかった。「なんだよ、死んだのかいや」と言って、残念だけれど受け入れた。今は色々な方法で、より心安らかに亡くなられるようになったのにもかかわらず、死に対する受け入れというか、なんでしょね、諦めというか、認め方が、この人たちの頃のほうが、きちんと認めてこられた。今は設備が整って、説明も丁寧にしなければいけない、痛み止めもしっかり使えとか、様々な症状に対応できるようになってきたのにもかかわらず、だからこそかな、死はあってはならないものになった。

「死があってはならない」という考え方も私は大事だと思うんですけど、「この人らに負けるな」と言っても負けるんですよ。この人たちの死生観や、生活の思想というと大袈裟ですけど、圧倒的なものがありましたのでね。一見「何もない」というところがポイントで、「なに考えとるだ」「なんか貧乏だし」「知識があらへんし」と一見見える人が、人生の実力者だった。そういう感じがしますね。『スペース』に登場した、いい5人を思い出させてくれましたね。

しかし、今『スペース』から「取材してこい」と言われたとして、誰がおるかいなと思います。老人施設をずっと歩いてから、「あ、こんなところにおった」という感じ。もう街にはおらん。

安藤 当時はおったんですね。

徳永 おりましたよ。こっちがもう、「この人、面白い」と感じる鮮度が落ちて、よう捕まえられないんでしょうけど。そういう点もあるけど、みんながベルトコンベアに乗って、すべてのことを済ませていくので、やむを得ずこうなるんでしょうね。だからと言って、あの頃のように貧しくなり、スマホを捨てて、セブンイレブンも封鎖してもらっていいかという、そうはいかん。

でも、「おいしい」「おもしろい」と言って笑うとか、思いがけない言葉とか、まだまだ人間の中に残ってますわ。それさえもなくなって、みんなが無表情で、何も話さずに、ロボットみたいにしたら、まあ、終わりでしょうけれども、そこまではいけない。「昼食B」というカプセルがあって、それをグッと飲んで昼飯終わり、という時代がきたらどうし

ようかと思います。今のところ、みんな弁当を作ったり、それなりに人間の手がかかっています。それが、朝用の「カプセルA」があって、「カプセルB」があって、最後に「C」があって、それで済むとなったら、さらなる新しい問題をはらんだ時代です。

今は朝、昼、夕と食べますね。買うにしても、誰かが作るにしても、「うまいな」と感じながら消化管を通して、人によっては人工肛門だけれども、肛門や尿道から出ます。これに変化が起ころうになったら問題ですが、なかなか変わらなんでしょうね。食うことと出すことを一つの管で繋いで、管の中で生命が可能になっています。人間の命が、その1本の管で続いている限りは、そうは簡単に変わらない。

もう昔がいいとは言えんし、こんな時代が変わって、「何かしわいや」と言いながら、「意外とセブンイレブンのこれ、うまいな」と思ったり(笑)。どっちかはっきりせいと言っても、はっきりしにくい時代になったのだけれども、救いどころは、なお口で食い、尿道・肛門で排泄すること。そこは持続可能などころだな。

前はね、「だいたいスマホがいけんのだ」とか言いよったんですよ。今でもパソコンじゃなしに、3Bの鉛筆で書いとるんですけど、みんなから白い目で見られる(笑)。でも、そういうふう過去の古き良き時代をというのは、限界があるなと感じるのは、生れて育った環境が違いますが。戦争に行かないけんということは、今のところないし、飢餓状態で、芋や温野菜を食うこともないし。給食はこういう形で、問題を含みながらもある程度広がって、貧困の子どもを取りあえずは見えないようにしてきたというふうな流れがあると、この時代の悪口を言うのが好きなんですけど、言ってみたとこで変わらぬやうないぐらい、もう圧倒的な勢力なんですよ。だから、ぼやきながらごちゃごちゃと言っているんですが。

雨滝の豆腐⁽³⁰⁾も、ほんとに障害のある人たちが「やろうぜ」となるといいんですが。必ず行政がバックにつかんとできんようになってるんですね。行政も、そういう(民間を応援する)ことをさせてもらわんと、することがわからん(笑)。単独で豆腐を売って、経済が成り立つというのが好きなんですけど、そこに補助金が入る社会になったからな。

安藤 『スペース』なんて、(行政から補助金を)一円ももらわず作っていたんだけど。

徳永 あれがよかった、もちろん。

安藤 そう。原稿料も出してないし。(むしろ)書い

た人が売って回ったり、自腹切って（自分が買い取って）配ったり・・・。

徳永 そういう時代だったから。でも、愚痴を言っても仕方ない。

安藤 （今の若者に）何か伝えたいことはありますか。（浜崎）洋三さんみたいに。

徳永 まだそれはできない。洋三さんが60歳のときに、亡くなられるなら何かしゃべってとお願いして、話された言葉が印象に残ってるんですけど⁽³¹⁾。洋三さんの年より10年も長く生きとつても、「伝えたいこと」っていうタイトルでしゃべれと言われたときに何が言えるかなと思うぐらい。

歯を抜かれ、足を抜かれ、髪の毛は前から抜かれ（笑）。団塊の世代だから、ちょっと頑張らないけんのですけど。「なんとか反対」みたいなを言いたいところだけど、気持ちはあるけど行動がしっかりせん。「ポーっと生きてんじゃねーよ！」とチョコちゃんにも言われてる。

安藤 特に、大学生に言いたいことはありますか。

徳永 学生さんね。

安藤 50年前に学生だったんですね、僕たち。50年たって変わらんこともあるし、変わったこともあるし。昔、西高の後輩の卒業式に、「西高生頑張れ」って貼り紙して怒られたこともありましたけど。

徳永 そうそう、大学生の時だよな。大学生、最後のチャンスですよ。その次に待ってるのは悲惨な、暗い大人の社会です（笑）。光もなんもないし、生きがいもないし、ろくな言葉もないのに、収容されていくという感じですよ、大学卒業したら。収容前の猶予期間であるのは昔と一緒にですけどね。でも、おそらく嘘でもいいけ、「俺はこれをしたんだ」ということを見つける以外ないんですよ。

（どうやって見つけるかという、例えば）コンビニにおみくじコーナーを設けて、「あなたが今後生きる道、引いてください」と言って、「凶」や「吉」を引かせる。自分の頭で考えても出んのじゃないかと思うんですね。「成績いいけえ、理工学部、医学部行けや」ということになったり、誰かが決める。それに従いなさいという教育も受けている。ゆとりの時間は最高だけど、強制的に「ゆとりを」と言われて、「何がゆとりかい」と思うみたいなもんで。

ボケーツとしてたら、何か現象が自然に起こってきて。なんていうんでしょう、寒天培地に菌がある。この菌は悪い菌だけん、抗生剤を使う。その菌が死んで、「いやー、勝った、勝った」と安心した途端、

「あれ？」と変な菌に気づくんですね。「あ、これ、〇〇菌だ」となって、それも殺して、これでようやく新しい時代、〇〇菌も△△菌もやっつけたと思ってふっと見たら、必ず別の菌がおる。それが一つの真理を示していて、「生える」「湧く」というような現象は、絶対に途絶えないんですよ。

学生さんが困った、生きがいも持たんし、大変だということで、サイコロでも振って3が出たら「3に行け」とか、末吉が出たら「その方向で行け」みたいな感じで、もう自分で決めんでもええけえ、でも（おみくじを）引いたその後は責任を取れよというのも一つの方法だと思います。あなたの考えとあなたの言ってることはあてにならんけ、自分で決めんでもええ。でも人から決められたら、特攻隊みたいなものですね、行きたいこともないのに行かされる。いつ「特攻隊員になれ」と言われるかわからないが、それまでは自由、という方法。

もう一つは、「なーんも、このままでええけえ」で、ダラーっとして、フリーターでもニートでも、自由に、使命感も持たず、ボケーツとした若者が相当数この国に増えると、気圧が変わってきて、道ができてきます。どんな道か分からんけど。それは嘆かわしい道かもしらんけど。

国ってそんなもんでね、きつと。戦争して反省して、「今度戦争したら許さんぞ」って大きな国に言われて、「はい、分かりました」と言いなりになっている。「お座り」「お手」状態の国になったことを、みんなが「平和だ、平和だ」ととりあえず言っている。「こうがいい」と思っても、ならん可能性があるもので、何も思わんことにして、全員が投げやり生きる。そうしたらふつと道があって、「なんだらう」と。そこに入ったら、迷子になりながらもやり抜いて、という感じですね。戻ってきてもいいんですけどね。そのぐらいのことしか言えない。

私は使命感みたいなことを教えられた世代で、人のため、社会のためには自分を捨てることも辞さないというような。今は、はやらんと思うね。あれも流行だったのかと。人民のために、農民とともに、貧しい人のために、これはもう殺し文句というか、医療もそうでないといけんとか押さえつけられとったんですよ。でもみんなが、「あほな、そんなん」と言い出して。

安藤 どこかインチキだと。

徳永 インチキだというか、もうそれは死語だと言われたんです。死語と言われていいんです。でも私

らには、七味唐辛子みたいにピリッと効いたんですよ。今振っても、何にもない。七味がもう褪せてしまって、辛味もなくなって、振ってみても効かんというの分かつとるけ、振らんのがいいんじゃないかなろうかって。

安藤 逆にね。

徳永 うん。でも生える。さっきの寒天培地みたいなもので、ほっといたら何かが生える。全然予想できんけどね。その人の中の、誰からも強制されなかった、ほっとかかれたっていう経験が、どちら側に動くか分からんけど、何かの土台になるんですね。私らの貧しい時代は、日本が頑張らないけん、働け、産めよ、増やせよ、人のために、というスローガンチックな言葉が有効だったですよ。だまされやすいほうだけれども。

新しい時代になって、大学生に何を言ってあげたらいいですかと聞かれると、ちょっと言葉を失うわけですね。もう同じ言葉を言う気はないです。聞く耳は絶対に持たない。よくこんなに何もなくて生きていけるなというぐらい、口から肛門を繰り返しているわけですが、それはそれで独自ののかも分からん。

ちょっと言葉が悪いですけど、アホな人たちの世代、4年後は闇の牢獄のような社会に入っていく人たちが、アホのままでこの4年間を過ごすというのは相当な実力で、私らには真似ができません。アホのままいってみたら、何か違うものが生れるかもしれないという期待に、根拠は何もないんですよ。

いろいろ言ってみましたけど、多くの先輩、実績を上げた医者たちも、高齢や病気で亡くなりました。亡くなっても、その人たちが残した言葉や実績はすごいものですが、でも、まあ変わりなく死んでいくわけです。なので、これは何か別のものが動いている感じがあって。立派な医療、立派な教育をしてもしなくても、何か違うものが、また形を作るだろうと思います。

ただ一つ抵抗したいのは、お上がバーッとやってくるもの、押しつけてくる道、その恩恵を受けすぎると自分の道が見えなくなる。「生える」という力に気がつかなくなる。湧いてるのを見失うということがあるので、行政にしても、国にしても、厚労省にしても、文科省にしてもだけど、それらがやってくることには、あまり従う必要はないんです。逆に自分たちが右往左往してるのが、お上や行政に届くことがあるんですね。その人たちも困ってるんで

すよ、どうしたらいいか、分からんけえ。全体で言うたらアホの時代ですから。

だけど、あまり出来のいいのがおって、全員を無理やり従わせるというような強制的な社会ができるといけんの、ワートと、いろんな意味のアホがおるほうがいいですよ。統一社会になると、やっぱり怖い。死の形として一番怖いのは、捕虜、処刑、言うことを聞かない人たちに強いられる戦争死です。次に飢餓で死ぬ、食べるものがなくて死なせること。病死は、これはやむを得ない事情があるので、私は医療者ですから考えないけんのもある。

なぜそんなことを言うかということ、今、そのような危機感を感じないけども、感じずにすむようにしてもらってるバックがあるんです。医療者なものだから、癌のことや認知症のことで追われているけれども、戦争を起こさないために必要なこと、飢餓を起こさないための工夫を考えなければいけん。

日本は食料自給率が三十数パーセントといいます。「農業は大事だ」と言いながら、牛耳ってるのはアメリカですね。輸出をパッと止めたとたん、日本に米と小麦とトウモロコシが来ないようにできて、日本をすぐに飢餓に陥れる状態がつくられているという文章を読んで、「えー、そうだったか」と思った。すぐ洗脳されるほうなので。

でも、それだって本当は重大なことですね。気がつかずにおる中で、食えんで、戦争に行けと言われて、相手兵を殺したりするようなことがあってはいけんのに、このままだと、いくらでもみんな行かれます、アホすぎて。だから、「ボーッとするな」と言っているのですけどね。

結論は、私の言葉じゃないんです。人の言葉で、「路あるところでは私は私の道を見失う 大海には青空には どんな道も通っていない 路は小鳥の翼の中 星の篝火の中 移りゆく季節の花の中に隠されている そうして私は私の胸にたずねる——おま前の血は見えざる路の智慧をもっているかと。」⁽³²⁾ 僕が一番好きなのは、冒頭の「路あるところでは私は私の道を見失う」という一節です。

あらゆることがマニュアル化された社会では、ちょっとでも間違えば処罰されるので、機械化することで「安心」を得ようとしています。ロボット手術のように、AIによって一見安全な社会を作ろうとしてるんですが、そこには『スペース』で語った人たちは登場しない。太古、原始に人として生きて、食う、ひる、愛し合うということをして直接にやった人たちが

すけど、今は直接が避けられとって、「道はここだよ」と示される。その道が問題なんです。「道ができているところでは、私は私の道を見失う。」

道というものを、みんなどうやって見つけるのか。湧くのか、あるものを使うのか、強制された道路を捕虜として歩かされるのか。それはどんな道なのかということですね。「新幹線のこない鳥取県」というので、平井(知事)さん⁽³³⁾には売ってほしいな(笑)。つまり「ない」ということが、一つの力になる。「ない」ところには原始があるんですね。工業化、近代化しないところでも、なお人間は生きるし、流れ星はあるし。

学生さんに、もっと人のためにとか、日本が置かれている危機の状態を学ぼうと言ったり、行くところがなかったら自衛隊に入ろう、農業をしよう、船に乗ってカニをとろう、観光に取り組みましょうなどと提案するのではなく、「ない」ということをじっと見つめてもらって、「なんぞ、湧かんか」と問うてみる。湧かんかったら、しばらく湧かんでもええ。湧いても、年を取ると、「もうやめとこうか」と理性が働く。若い頃は理性が働かんからいい。

安藤 だんだん小利口になってきたんだ。

徳永 小利口、いい言葉ですね。ちょっと勇気がなくなってくるんやね、もう。だから、あまり学生さんたちに上から目線でどうこう言いにくくて、ボケていきましょう、と。でも、状況をじっと見ていて、湧いたものがあつたら、突っ走ってと言いたい。災害があると、若い人がパッと動いたり、若者で優れた冒険家もいるし、研究者もいるし、お笑いさんもいる。もちろん、表現者も。寒天培地で「何も湧かんわ」と思っていたら、「あ、違う形の湧いてた」と思わせる表現者がありますから。「こういう表現者があるべきだ」と言っても全然出て来ないけれども、突然、その人の中で特殊な冒険を志す瞬間があつたり。

未踏の地はもうないと言われてます。今、世界中どこでも Google で見ることができる。じゃあ、冒険の意味とは何か。みんなが行ったことのないところに行くのが冒険だと思いがちですが、ある冒険家は、人と違う体験をする。太陽が3カ月間出ない土地で、久しぶりに太陽が出たときに、自分は何を感じるのか、その瞬間の自分に出会いたいという冒険です。それはその人の心に湧いたことですね。

そういう意味では、みんなが冒険家になれるわけではないのですが、毎日、自分の心に「湧いてない

か？」と聞いてみる。それだけして、あとはなくていいです。そして、湧いたら動いてねって。

安藤 ありがとうございます。肉声で学生さんに今のを語る時間はないよな。

徳永 ないし、聞くほうも大儀だわ。聞く耳もたん、意外と。

安藤 この間ちらっと聞いたら、患者さんが公民館には来ないので、公民館にはわりあいしゃべりに行くと。

徳永 だってみんな、病気になったり、舅さんが認知症になったり、いろいろするけえ。ワートと禁句を言う。年寄りに、もうほどほどに死にましよう、死ぬまでに全部好きなことをやっといってくださいっていうと、具体的なもんだだけ、そのほうがウケやすい。舅で困つる嫁さんが、「ようそこまでいってくれた」と。

「年寄りに寄り添って」と言うけど、寄り添うっちゃうようなことを言うのは政治家ぐらい。もうめちゃくちや言わせてもらって、こっちがすーつとするもんだけえ、向こうも「ああ、いいこと聞いた。でも先生、ちょっと言いすぎだで」と(笑)。人権集会とか健康講座で、長生きをあまりするなという話をするから(笑)。そんなのは話せるけど、学生さんはやっぱり難しい。

若い人は、これからですね。清く正しくというのも、ほんとは好きなんですけど、真反対を生きるようになったんですね。臨床というところがピュアではあり得ないところなので。看護師さん一つとってもね。注射を持って行こうとしたら、14号と4号、部屋を間違えて、打ちました、例えばね。それはもう許されん。それを一回やると、みんなが下手人、自分も犯罪者であることに気がつくわけです。白衣の天使たちが。

気がつかずにピュアで行く人は疲れるんです。自分は犯罪者だって気がついた人は、その誤りの償いがあるんですね。償いには時間がかかるから、それで続けられる。生まれつきピュアな人、ないことはないですが、シスターになつたりして、神の僕しもべとして、何を言われても絶対怒らない人があります。

うちに来る患者でおつたりするんです、お茶を投げたりする人。普通は「やめなさい」と言って制圧する。でも、制圧しないことができる人が何人かおつて、一人は生まれつきのシスターみたいな人。もう一人は、過誤の中で許されたという自覚のある人。この人たちは、「やめなさい」とは言わないですね。

私なんか、「いけんって言ったが」って言って、ピュアではあり得ない(笑)。ピュアなものには、やはり用心が要りますね。

安藤 用心が。

徳永 はい。「寄付金100万円、持ってきなさい」という新興宗教団体がある。「おかげがありましたから」と、ピュアすぎて怖い。そこを疑うということも大切ですね。間違いがないという人が一番心配です。だいたい、そういう間違いの多い人が好きなんです。別の意味のすごさがあるんです。

IV. タウン誌『スペース』とその書き手・徳永進 本とその資料展

1. スペース展 IN 鳥取大学

タウン誌『スペース』を対象とした講義を行った岡村知子とそれに協力した筆者を中心とした実行委員会が結成されて、2019年2月1日から28日にかけて、附属図書館とCDLの2か所でスペース展が開催された。

その目的は、「講義や論文の基礎資料となった『スペース』全136号と、その関係資料・関係図書を、大学関係者と地域の人々との協働により、鳥取大学附属図書館およびCDLにおいて公開・展示することとした。本展示は、こうした資料や書籍が、鳥取という地域を対象とする様々な研究分野において活用されることを願うものである。」(スペース展「あいさつ」から)

展示品は、タウン誌『スペース』全136号、徳永進著作、編集の参考にした書籍(以上は、附属図書館所蔵)、また、全国各地のタウン誌、事務所日記、編集部内部通信、その他編集に使用した関係資料など(筆者所蔵)、(タウン誌『スペース』本体を除き)総数で110点である。

特に、CDLでは表紙を飾った人形の制作者の大岩明彦(当時、鳥取三洋電機デザイン部)の実物人形や網師本日海による誌面に掲載された「一筆劇場」の実物の書などの芸術作品も展示された。

附属図書館会場では、前年開催され好評だった「イラストレーター毛利彰・原画展」と同じく、入館ゲートからラーニング・コモンズに向かうホールが展示スペースであった。附属図書館の1日平均入館者数は、1,700~1,800人といわれている。筆者は、展示の解説などを目的に、かなりの日数、会場に詰っていた。地元紙などにも取り上げられたこともあって、学外からと思われる入場者も見受けられた。

また、CDL会場では2019年2月14日に「タウン誌『スペース』を語る」と題したトークサロンも開催された。鈴木暁彦(長崎県立大学教授)は「時代の変化とメディアの状況」と題して講演した。彼は、朝日新聞鳥取支局当時からタウン誌『スペース』を応援しており、鳥取から転勤後も「シリーズ中国紀行」などを投稿していた。また、小笠原拓教授(当時は准教授)や筆者もそれぞれトークを行い、参加者との意見交換も図った。このトークサロンには、学内からは学生・教職員、学外からは地域づくりの関係者など、30人の参加があった。

鳥取大学でのスペース展全体の模様は、地元紙の日本海新聞や朝日新聞鳥取版に大きく取り上げられた。

学外者の戸國航(当時は、鳥取西高2年生)は、タウン誌『スペース』を長く支えてくれた定有堂書店発行の『音信不通』(第2期第32号 2019年3月)に「高校新聞」と題して、次のように書いている。

「私は休日にはよく鳥取大学図書館に行く。(中略)大学図書館では一階のロビーに郷土資料の常設展示があるのだが数か月前から、鳥取のタウン誌であった『スペース』の展示がされている。(中略)一つ大変興味深いものがあった。それは鳥取西校新聞集という本で、それはスペースの制作者である徳永氏が鳥取西校の新聞部であったために、氏の縁深いものとして展示されていたのだ。今では、西校新聞は廃刊の憂き目にある^マっているが、昔は非常に精力的に制作されたようで、どの月の新聞も哲学から文藝、学校教育の反証と非常に広範囲に情報をとらえており、また大変重厚な内容である。(中略)そのうち私が西校新聞を復活させたいと思うようになった。」と。

例えば、このように、スペース展は(タウン誌を復活させたいというものではなかったが)地域の文化に「何らかのインパクト」を与えたと考えられる。

(安藤隆一)

2. スペース展 IN 鳥取県立図書館

県立図書館では、スペース展実行委員会との共催により、スペース展(会期:2019年5月10日~6月9日、開館日数30日、来場者275名※職員による計数)を開催した。この開催の契機は、附属図書館を会場としたスペース展会期中に、主催者より「大学関係者のみならず、広く県民に鑑賞いただき、地域文化の振興を図りたい、との声かけをいただいた

ことによる。

県立図書館では、所蔵するタウン誌『スペース』、徳永進著書及びミニコミ誌等の展示資料を準備すると共に、掲示パネルの作成などの実作業も協力しながら展示準備を進め、スペース展及び連携イベントに係る事前の打合せや作業、また意見・知識の交換を通じて、実行委員会や大学関係者、地域の文化振興や活性化に取り組む方々との人的交流の機会を得られた。館内の展示場所は、主会場として特別資料展示室(2階郷土資料室)を使用し、更に多くの来館利用者の目に留まる貸出カウンター前(現書籍消毒器設置場所)、階段下展示スペース(共に1階)を活用し、後述する連携イベントと相俟って図書館内外を広範に使用しての企画規模となった。



特別資料展示室

(撮影：鳥取県立図書館 2019年5月14日)

スペース展の協力団体には、「スペース」の会、「知のカフェ」の会、鳥取銀河鉄道祭実行委員会、鳥取大学地域学部小笠原研究室、同大附属図書館、同大地域価値創造研究教育機構が名を連ねた。

特に、連携イベントの開催を主催した2団体とは、県立図書館職員もスペースの活動に倣うかの様に手弁当で参加し、住民参加型の一箱古本市「第2回トトリヒトハコ」(5月26日開催)では主催する小笠原拓教授(当時准教授)の研究室のゼミ生と共に図書館に隣接する芝生の中庭空間を活用した企画を実施した。この目的は「本を介したコミュニケーションやにぎわいの創出」としており、約20店舗が県内外から参加し古本市を催した。参加者には県内こども食堂の運営に関わる学生らが運営したものや、県立図書館も出前図書館による図書展示、貸出しを行った。これには延べ200名程度が来場し、図書館としては、県民に関わりを求め、図書館資料を使用したにぎわい創出に貢献できたことが評価され、これらが大学での研究、授業から発した連環であるこ

とに意義を見出したい。



「第2回トトリヒトハコ」

(撮影：鳥取県立図書館 2019年5月26日)

二つ目の連携イベントである「知のカフェ」(5月26日開催)は「新しい本の世界を拓く」をテーマに話題提供者として、鳥取大学地域学部小笠原拓准教授(当時)と共に、県立図書館から高橋真太郎司書が登壇した⁽³⁴⁾。この中では、図書館の未来、本を取り巻く環境やコミュニケーションの場の創造などが語られた。

この資料展、そして協力団体との連携イベントの双方を通じて、「産官学民」の連携の一事例を示せたと捉えたい。

また、安藤からは、この機会に県立図書館の『スペース』欠号の寄贈を受けるなど、一連の繋がりの中で郷土資料の充実が図られたことも付記したい。

(佐藤紘一)

V. まとめ

鳥取県八頭郡丹比村(現八頭町)出身の歌人・杉原一司の歌集が、没後70年にあたる2020年に岡村や安藤も参加した刊行会によって発刊された。一司は、一部には「戦後前衛短歌の隠れたリーダーの1人として」⁽³⁵⁾評価されているが、23年という短い生涯からほとんど知られておらず研究も進んでいなかった。

生前に発表した短歌、恩師・前川佐美雄や盟友・塚本邦雄からの書簡、制作ノートなどの貴重な資料は妻・令子や長男・ほさきの手で杉原家に保管されてきた。今回、これらの資料が公開されることによって、『杉原一司歌集』(総合印刷出版 2020年3月)、『杉原一司宛 前川佐美雄書簡』(鳥取大学地域学部 2021年3月)が刊行され、戦後の短歌史の空白を埋める貴重な文献と期待されている。

しかしながら、こうした例は稀である。多くの場合、地域の文学者の生前の資料などは、遺族の手によって処分されたり、保存中に水害や火災などの災害にあって消失しているという。

「公文書館とは、国や地方自治体が作成・取得した公文書等の中から、歴史的資料として重要な価値を有する公文書等を国民や地域住民の共通の財産として継続的に後代に伝えるために、これを保存し、利用に供する施設である」⁽³⁶⁾と、いわゆる行政作成の文書については、公文書館という形で保管・公開されている。

しかし、公立ないし公設の文学館や文化館などのない鳥取県では、近現代の文学や文化事象に類する資料は、個人やその遺族の手によって保管され、他には公開される機会が少ない⁽³⁷⁾。図書館では、地域資料は「郷土資料」や「特殊資料」などとして収集、整理し、利用に供されてきたが、殊に現代の資料については資料の種類や価値判断が多様化し、その扱いは難しいのが現状であろう⁽³⁸⁾。

県立図書館においても同様の課題を抱えるが、このほど、タウン誌『スペース』の編集関係の資料、雑誌に関する講義、スペース展などの一連の関係資料の寄贈の相談を受け、巻末の目録のとおり、受贈手続きに向けその準備を始めることになった。

以下は、寄贈の相談と目録作成とに携わった者として、本事例の様な地域文化資料の保存、活用と連携について筆者の見解を記すものである。

今日、図書館、そしてその利用者をはじめとする社会は、研究者による研究成果や基礎資料の構築、また普及啓発に類する出版物が所蔵されることで、それらに享受する環境を得ており、出版物等を所蔵し提供することで、図書館もまた知識の蓄積と伝播に関わっている。一方で、今回の様な形で大学の研究ないし講義の素材となった一連の資料群が地域に還元される機会は、それ程多くの事例を見ない⁽³⁹⁾。

多くは、研究室や研究者個人の所蔵のままといった場合も考えられるが、資料保存機関にあってその資料収集方針（多くの場合、何を残すかは資料保存機関の性格と地域の諸事特性による。）と、研究素材となった資料の性質、性格とが合致しなければ、機関によって「収集」する意思決定はおこなわれにくいものである。

本事例では、研究素材に地域の文化活動に関わりが深いタウン誌が活用された点と、研究者による深い洞察と論稿、そして講義という形をとり伝えるこ

との意義が付加された資料であったことが大きな意味を持った。

一般に、資料保存機関では収集資料の整理作業を通じて、一義的な理解が深まり、目録等の整備によって活用が促される。しかし、整理作業は資料の物量と包含される情報量とによって、その作業時間、労力は増大するのが実際であり、資料の受入れから利用へと進むサイクルに乗るには時間を要することとなる。今回の様な当事者による一次情報を含めた目録整備を経た上で資料を継承する機会は、極めて稀であると思われ、このことも有意な繋がり的一面といえる。

地域資料を扱う場では「地域の主人公は地域住民であり、行政、文化のあゆみについて知る権利と、地域の未来に伝え発信する義務がある」⁽⁴⁰⁾と語られて久しく、国立大学も地域に開かれた大学の姿を求められ、人材や研究の地域への還元が求められるなかで、本事例の在り方は有意なものと考えられる。記録されることなく失われる現代メディア事象にとり、特定の鳥取県民の文化活動の一端とはいえ、資料として残されることは、当該地域の文化史を語る上で貴重である。

資料保存機関では、直近の現代文化資料も地域の文化活動のあゆみを物語る資料として収集することが必要であり、文化の記録として保存と活用が図られるべきと考えるものである。

本事例でもう一つ特異な点は、「スペース」の当事者である安藤が直接関わり、また橋渡しの役割を果たすと共に、前述の資料整理を自らの役割として担った点にある。この整理及び目録作成作業には、県立図書館の佐藤が協力したが、この様な当事者が主体となる姿は県内では河本家住宅保存会(琴浦町)の整理作業など、決して多くの事例を見ない⁽⁴¹⁾。本事例の意義を端的に表せば、寄贈資料の意味は、その一に講義の素材として丹念に調査され、研究的観点を伴って検討が加えられた文化史資料であるという点である。その二に当事者により丁寧に整理された民間資料という点である。

なお、後掲の資料に付す「整理目録」について、整理状況と若干の凡例を以下に示し、資料活用の助けとしたい。

①本資料群は、研究、講義、資料展を通じて生じた現状を基に、本資料群に含まれる個別資料の生成・収受に直接、間接に関わった所蔵者安藤隆一によ

り再整理をおこなったものである。このため、備考欄の情報には、資料の性格、実際に活用された情報など、安藤による貴重な情報の付与がおこなわれている。

- ②資料の再整理は、資料の形態、用途、関係性を所蔵者により判断し、目録の作成及び資料整理の実際は県立図書館職員佐藤絃一が協力し実施した。
- ③資料名は、資料自体に記載された書名、簿冊名を採った。未記載の資料には、任意に付与し「[]」（亀甲括弧）」で明示したほか、適宜補足情報を「（）」（丸括弧）」で明記した。
- ④資料が封筒、ファイルなどに一括された状態の資料は、枝番号を付し、その関係性を明示した。
- ⑤書籍などの作成者欄は、仮目録作成作業の過程で省略したものがある。この場合、資料名によりその書誌情報を確認することができるよう、資料名の正確性に配慮した。なお、作成者欄の「編集部」としたものは、安藤により再整理によって確認した内容である。
- ⑥この仮目録は、将来県立図書館へ寄贈の後、改めて目録の編成をおこなう場合がある。

最後に、本事例については、講義録、論稿、スペース展を通じて感得された文化資料としての意義と、その事象のありようを記録し残すことは、未来の文化を創造するサイクルの一つであることをここに確認しておきたい。本資料群の寄贈の後、受け手である資料保存機関には、資料目録の公開や当時の文化事象の紹介など、様々な企画を通じて資料を紹介し、多くの利用者に資料が活用される工夫が求められる。また、研究者や学生、県民といった利用者がこの資料群の活用の道を育むことも期待したい。

(佐藤絃一)

注

- 1 「編集室から」(『まちの本 スペース』6号 1980年3月)
- 2 安藤隆一「編集室から」(『まちの本 スペース』20号 1985年7月)
- 3 「スペース編集室」(『まちの本 スペース』2号 1979年5月)
- 4 徳永進『死の中の笑み』(ゆみる出版 1982年2月)
- 5 鷺田清一・徳永進『ケアの宛先—臨床医、臨床哲学を学びに行く』(雲母書房 2014年6月)
- 6 徳永進「《街の友人》看板かつぎの宣伝マン じゅう

たあじいさん」(『まちの本 スペース』3号 1979年6月)

- 7 注6に同じ。
- 8 徳永進「みちばたの風景 トロ箱のおばさん」(『まちの本 スペース』4号 1979年9月)、徳永進「街角に坐るおシズばあさん」(『まちの本 スペース』2号 1979年5月)
- 9 注6に同じ。
- 10 濱崎洋三「地方史研究雑感(1) —研究者の資質と任務について—」(『まちの本 スペース』0号 1978年12月)
- 11 濱崎洋三「地方史研究雑感(9) 恐ろしい話」(『まちの本 スペース』8号 1980年7月)
- 12 濱崎洋三「地方史研究雑感(4) 古文書と読解力」(『まちの本 スペース』3号 1979年6月)
- 13 濱崎洋三「地方史研究雑感 白井権八と「悪党」—事実と真実の間—」(『まちの本 スペース』19号 1984年12月)
- 14 「連載小説 黒い花火」(『まちの本 スペース』11号 1981年8月)、「連載小説第二回 黒い花火」(『まちの本 スペース』12号 1981年12月)
- 15 注8の一つ目の文献に同じ。
- 16 「ボクラ、「戦争」は知らない」(『断層』7号 1980年9月)、「戦争ごっこ」(『断層』8号 1981年刊行月不詳)、「…そして、戦争の時代は始まった」(『断層』9号 1981年12月)
- 17 「美幸」(『断層』10~12、14、20、21号 1982年~1991年11月)
- 18 『死の中の笑み』(ゆみる出版 1982年1月)は、鳥取赤十字病院の内科医であった徳永が、「患者がかかえる全体からみると、医療が患者にかかわるのは、全くの部分だ」という自覚の下、そこで出会った人々を主人公とする“物語”を綴った書である。
- 19 松下竜一(1937~2004年)は、大分県の実家で豆腐店を営むかたわら歌作に励み、廃業後は、一生活者の視点から反権力・反開発を訴える運動・著述を展開。ミニコミ誌『草の根通信』の編集や、児童文学の執筆も手掛けた。下嶋哲朗『いま、松下竜一を読む—やさしさは強靱な抵抗力となりうるか』(岩波書店 2015年3月)参照。
- 20 1979年に創設された、ノンフィクション作品を対象とする文学賞。第4回(1982年)の受賞作は、徳永進『死の中の笑み』と、松下竜一『ルイズー父に貰いし名は』(講談社 1982年7月)であった。後者は、大杉栄と伊藤野枝の三女である伊藤ルイの半生を約一

年半かけて取材し、評伝風にまとめたものである。第41回より、講談社本田靖春ノンフィクション賞と改称された。

- 21 鶴見俊輔（1922～2015年）は、1942年にハーバード大学哲学科を卒業し、交換船で帰国、海軍軍属を経験し敗戦を迎えた。46年、丸山眞男らと「思想の科学研究会」を立ち上げ、雑誌『思想の科学』を創刊。反アカデミズムの立場から、大衆の思想と文化について研究し、60年安保闘争や「ベトナムに平和を！市民連合」などの市民運動においても中心的役割を果たした。徳永は、1968年に、鶴見が関わっていた「らい回復者社会復帰センター 交流の家」を手伝うようになり、翌69年、大阪城公園近くで開催された「反戦のための博覧会」に参加。会場に「らいの家」を建て、全国の療養所から送られてきた患者直筆の葉書を展示していたところ、鶴見と初めて対面した。それ以来、鶴見は徳永の仕事を見守り続け、次のように記している。「徳永は、その後も病院勤務医としての日常生活をつづけ、注文に応じて有料無料をとわず小グループ、大グループの前で、はなしの中に詩の朗読をまじえ、歌をうたい、足をふみならしてハーモニカをふき、そのあいだに、自分の出会ったたくさんの患者の死をみとった。まじめになることからくりかえし自分を救いだし、自分が笑われることを通して、自分のめざすところをつたえた。」（木村聖哉・鶴見俊輔著『「むすびの家」物語』岩波書店 1997年11月）
- 22 鶴見俊輔は「転向の共同研究について」（『共同研究・転向』上巻 平凡社 1959年1月）の中で、「思想はまず、信念と態度との複合として理解される。同種の信念が、ちがう種類の態度によって支えられるようになる時、もともと同じ信念を要素として含みながら、もとはちがう思想がつくられる。」と述べている。昭和8年をピークに、国家権力による共産主義者の大量転向が起こったが、鶴見は、一人一人の当事者に見られる特定の態度の持続や、その微細な変化に注目することで、「転向／非転向」という二者択一の発想を退け、態度に根差した思想形成のプロセスを重視した。引用は、『鶴見俊輔集—4 転向研究』（筑摩書房 1991年1月）に拠る。
- 23 柏木義円（1860～1938年）は、越後国三島郡与板（現・新潟県長岡市）の西光寺に生まれ、同志社英学校に入学し新島襄に師事した。その後、内村鑑三の非戦論に傾倒し、38年間刊行した『上毛教界月報』を通して、日露戦争から日中戦争にいたるまで非戦平和を唱え続けた。片野真佐子は『孤憤の人 柏木義円』（新教

出版社 1993年6月）の中で、「一介の田舎教師を自任」していた柏木は、「ごくありふれた新聞、雑誌と、知人や近隣の人々から得た知識」をもとに批判精神を培い、「自己の価値観を日常生活のなかで検証する姿勢をもちつづけた」としている。

鶴見俊輔は「義円の母」（『柏木義円全集1』月報 未来社 1970年）の中で、仏教徒でありながら、息子がキリスト教を信仰する自由を尊重した義円の母に、「ちがう思想を理解することもなしに力でおしつづす」のではなく、「自分とちがうものに恐れず近づき、ちがうものをつなぐはたらき」を見ている。その母の態度を受け継いだからこそ、群馬の地域社会において、義円は非戦論者である前に、「良い人」として受け入れられていたと論じている。引用は、黒川創編『鶴見俊輔コレクション 1 思想をつむぐ人たち』（河出書房新社 2012年9月）に拠る。

- 24 鶴見俊輔は、自著『不定形の思想』（文藝春秋 1968年4月）の「あとがき」で、「自分で自分にレッテルをはるとすれば不定形派ということになると思って、この題をえらんだ」として、次のように述べている。「「アモーフラス」（amorphous）という形容詞になると、「定まった形をもたない」、「非結晶の」、「定まった部分をもたない」、「定まった構造をもたない」から転じて、第五番目の派生的意味として、「組織だっていない、不消化の」と書いてある。その全部が、この本にあてはまる。」
- 25 1912年に、鳥取市職人町に創業した武蔵屋食堂。令和元年度「食のみやこ鳥取県」特産品コンクールで優良賞受賞。
- 26 スコットランド民謡のメロディに、大和田建樹が詞を付けた「故郷の空」。大和田建樹・奥好義編『明治唱歌 第一集』（中央堂 1888年）に収録された。
- 27 船津建「歌に見る歴史『鳳仙花』（『リベラシオン』141号 2011年3月）によれば、「鳳仙花」は、洪蘭坡が1920年に作曲したバイオリン曲「哀愁」に、友人の金亨俊が詞を付けた楽曲。朝鮮民族の苦悩が寓意として読み取れることから、抗日のシンボルとして歌われた。作曲者の洪蘭坡は、1918年に東京音楽学校予科（現・東京芸術大学）に入学したが、翌年に起こった三・一独立運動を支持したことで本科進学を拒まれ、26年に東京高等音楽学院（現・国立音楽大学）に入学。新交響楽団（現・NHK交響楽団）で第一バイオリン奏者を務めた。アメリカ留学中の37年、独立運動に加担した嫌疑で収監され、41年に死去した（享年43歳）。翌42年、日本留学中であったソプラノ歌手・金天愛

- がコンサートで「鳳仙花」を歌い、レコード化すると、日本当局はレコードを発売禁止にした。
- また、喜多由浩「朝のくに」ものがたり（13）歌には「抗日」も「親日」もない 「鳳仙花」歌う加藤登紀子（『産経新聞』2018年4月8日）によれば、加藤登紀子は1990年に韓国で行ったコンサートで「鳳仙花」を朝鮮語で歌い、洪蘭坡夫人と邂逅した。徳永が引用したのは、金護経が日本語に訳し、加藤が歌った歌詞であり、原詞の寓意は読み取ることができない。
- 28 II章で取り上げたものの他に、『スペース』に掲載された徳永進の文章は、以下の3編である。「鳥取食べ歩き—まずい高い—」（0号 1978年12月）、「子どもに夢を売る とっとり瓦町「六角屋」のじいさん」（1号 1979年）、「山を降りたやまんば」（6号 1980年3月 ※後に『形のない家族』（思想の科学社 1990年3月）に収録。）
- 29 バラエティ番組「チョコちゃんに叱られる！」（2018年より、NHK総合テレビジョンでレギュラー放送）に登場するキャラクター（声は木村祐一）。出演者が質問に答えられないと、「ポーっと生きてんじゃねーよ！」と叱り、専門家の解説VTRに誘う。
- 30 鳥取市国府町雨滝にある「とうふ工房雨滝」は、障害者支援施設と提携し、豆腐や豆乳などを製造、豆腐料理の飲食店と直売所を営業している。
- 31 濱崎が転移性肝がんで闘病中であった1996年8月18日、彼が顧問であった新聞部の部長を務めた教え子であり、当時主治医でもあった徳永らの呼びかけで、濱崎は「伝えたいこと」と題する最後の授業を行った（「ガンの恩師に「授業」贈る」『朝日新聞』1996年8月19日）。濱崎の死後、同タイトルの著作集『伝えたいこと 濱崎洋三著作集』（濱崎洋三著作集刊行会 1998年2月）が刊行され、徳永は帯文を寄せている。
- 32 タゴールの詩集『収穫祭』に収められた「路あるところでは」（山室静訳『タゴール詩集』彌生書房 1966年10月）
- 33 平井伸治（1961年～）。2007年に鳥取県知事に就任。
- 34 高橋真太郎「人と共にある図書館の未来は明るい」（『現代思想』第46巻第18号 2018年12月）
- 35 塚本邦雄「出会いの風景 生ける死者」（『朝日新聞』1995年1月27日）
- 36 安藤隆一「公と民の狭間からの協働論」（『入門・文化政策』ミネルヴァ書房 2008年5月）
- 37 太田尚宏「民間アーカイブズの保全と地域連携—東京都多摩地域での取り組みを事例に—」（国文学研究資料館編『社会変容と民間アーカイブズ—地域の持続へ向けて』勉誠出版 2017年3月）は、地域事例に基づく資料保存機関の事情と地域連携の実際の取り組みを紹介し、民間所在資料の保存に向けて課題があることを指摘する。
- 38 西村慎太郎「静岡県伊豆町地域の民間所在資料の保全—物語を構成すること—」（注37所収）は、利活用の頻度が少なく保存の担い手が限られる民間所在資料について、日頃から散逸する可能性を孕むことを指摘し、資料の「意味・意義を伝達する必要」と基礎情報としての目録の在り方に言及し、本稿の様な民間所在文化資料の保存について示唆的である。
- 39 岡村知子・榎木久薫・佐々木友輔編著『戦後NHK鳥取放送局ローカルラジオドラマ脚本集』（鳥取大学地域学部 2019年3月）。県立図書館では、研究資料として集積された資料を寄贈された事例がある。本例では、脚本に係る著作権処理が研究過程でなされている。
- 40 安藤正人『岩田書院ブックレット3 草の根文書館の思想』（岩田書院 1998年5月）
- 41 浅川滋男編『古民家「終活」の時代 文化遺産報告書の追跡調査からみた過疎地域の未来像』（公立鳥取環境大学保存修復スタジオ 2020年11月）

タウン誌『スペース』関係資料整理目録(安藤隆一所蔵)

作成: 安藤隆一/協力: 佐藤紘一

通番	整理番号	資料名	巻号	形態	用筆	作成年	作成者	発行所	備考
1	01	タウン誌全国カタログ		書籍		1981			p162 スペース記事掲載。発行所から編集部へ寄贈
2	02	知多っ子	33~48	書籍		1984		創夢社	全6冊欠号あり。発行所から編集部へ寄贈。編集の参考
3	03	ふるさと十勝	95~100	書籍		1985		北の編集室	全3冊欠号あり。発行所から編集部へ寄贈。編集の参考
4	04	月刊たうん	1~3	書籍		1985		ばく企画編集室	全2冊欠号あり。編集の参考
5	05	月刊タウン情報あーとらんどしが誌6月号	19	書籍		1985		アートランド社	編集の参考
6	06	流山わがまち	109	書籍		1988		流山わがまち社	編集の参考
7	07	総合情報誌「越路」	2	書籍		1984		(株)郷土出版	編集の参考
8	08	神戸っ子	261	書籍		1983		神戸っ子編集室	編集の参考
9	09	神戸・三宮センター	221	書籍		1973		月刊センター編集室	p37 安藤原稿掲載。編集の参考
10	10	中洲通信	39	書籍		1988		(株)ぐる一ふ・ばあめ FUKUOKA	編集の参考
11	11	月刊さっぽろ	284	書籍		1984		株式会社財界さっぽろ	編集の参考
12	12	すすきのTOWN情報	101	書籍		1988		情報発信あるた株式会社	編集の参考
13	13	旅と詩の同人誌「街」	1	書籍		1986		街の会連絡室	発行所から編集部へ寄贈。編集の参考
14	14	月刊ワンステップ	92	書籍		1978		ワンステップ編集室	編集の参考
15	15	月刊地域闘争	190	書籍		1986		ロシナンテ社	編集の参考

16	16	<ポパイ>8月25日号		書籍		1985	マガジンハウス	編集の参考
17	17	事務所日記 NO.1		ノート	筆記	1980～1981	編集部	
18	18	スペース事務所日記-2		ノート	筆記	1981～1982	編集部	
19	19-01	スペース通信	1	ペーパー -/- 紙	ガリ版印刷	1980.4.17	編集部	枝番一括
20	19-02	スペース通信	2	ペーパー -/- 紙	ガリ版印刷	1980.4.24	編集部	
21	19-03	スペース通信	3	ペーパー -/- 紙	ガリ版印刷	1980.5.1	編集部	
22	19-04	スペース通信	4	ペーパー -/- 紙	ガリ版印刷	1980.5.8	編集部	
23	19-05	スペース通信	5	ペーパー -/- 紙	ガリ版印刷	1980.5.15	編集部	
24	19-06	スペース通信	6	ペーパー -/- 紙	ガリ版印刷	1980.5.22	編集部	
25	19-07	スペース通信	7	ペーパー -/- 紙	ガリ版印刷	1980.5.29	編集部	
26	19-08	スペース通信	8	ペーパー -/- 紙	ガリ版印刷	1980.6.5	編集部	
27	19-09	スペース通信	9	ペーパー -/- 紙	ガリ版印刷	1980.6.12	編集部	
28	19-10	スペース通信	10	ペーパー -/- 紙	ガリ版印刷	1980.7.5	編集部	
29	19-11	スペース通信	11	ペーパー -/- 紙	ガリ版印刷	1980.7.17	編集部	
30	19-12	スペース通信	12	ペーパー -/- 紙	ガリ版印刷	1980.7.24	編集部	

31	19- 13	スペース通信	13	ペーパー —/— 紙	ガリ版 印刷	1980.7.31	編集部	
32	19- 14	スペース通信	14	ペーパー —/— 紙	ガリ版 印刷	1980.8.14	編集部	
33	19- 15	スペース通信	15	ペーパー —/— 紙	ガリ版 印刷	1980.8.29	編集部	
34	19- 16	スペース通信	16	ペーパー —/— 紙	ガリ版 印刷	1980.9.10	編集部	
35	19- 17	スペース通信	17	ペーパー —/— 紙	ガリ版 印刷	1980.10.21	編集部	
36	19- 18	スペース通信	18	ペーパー —/— 紙	ガリ版 印刷	1981.1.15	編集部	
37	19- 19	スペース通信	復刊1	ペーパー —/— 紙	ガリ版 印刷	1981.5.14	編集部	
38	20- 1	スペース速報		ペーパー —/— 紙	ガリ版 印刷	1981.8	編集部	
39	20- 2	スペース速報	2	ペーパー —/— 紙	ガリ版 印刷	1981.8	編集部	
40	20- 3	スペース速報	3	ペーパー —/— 紙	ガリ版 印刷	1981.9	編集部	
41	20- 4	スペース速報	4	ペーパー —/— 紙	ガリ版 印刷	1982.1	編集部	
42	21	スペース通信(号外)		ペーパー —/— 紙	ガリ版 印刷		編集部	
43	22	スクラップブック						新聞に掲載された「スペース」関係記事。編集室内部文書「スペース会報」「スペース内報」
44	23	編集クリアファイル1		クリア ファイル			編集部	スペース会報。原稿依頼。販売一覧。日程表
45	24	編集クリアファイル2		クリア ファイル			編集部	NHKTV 出演キューシート。販売一覧表。編集関係資料。新聞記事

46	25	編集クリアファイル3	クリアファイル		編集部、その他	編集部名簿。新聞記事。未掲載原稿。『週刊東洋経済』記事。伝票類
47	26	手紙ファイル	クリアファイル			編集部への書簡
48	27	(安藤への)連絡簿 (営業報告)	レバーファイル		編集部、その他	編集関係・販売関係資料。「杉の雪・吟醸の会」など委託事業の関係資料
49	28	その他資料クリアファイル	クリアファイル			編集、営業等に参考になる資料
50	29	0号編集関係資料	ペーパー		編集部	発行趣旨。販売先リスト
51	30	3号編集関係資料	ペーパー		編集部	スペース会報。原稿依頼
52	31	4号編集関係資料	ペーパー		編集部	編集関係メモ
53	32	5号編集関係資料	ペーパー		編集部	編集関係メモ
54	33	6号編集関係資料	ペーパー		編集部	スペース会報
55	34	11号編集関係資料	ペーパー		編集部	編集メモ。原稿依頼書。広告作成資料
56	35	17号編集関係資料	ペーパー		編集部	担当表。参考資料
57	36	25号編集関係資料	ペーパー		編集部	担当表。台割表(一部)
58	37	原稿依頼書	ペーパー		編集部	後藤、西村酒店、徳永、小田各あて
59	38	写植文字見本	ペーパー	印刷		
60	39	スペース28号校正用見本		校正用印刷	編集部	校正のための出来上がり見本
61	40	編集、営業関係資料	ペーパー		編集部	台割表。売上表。編集部名簿。編集メモ
62	41	取材・執筆にあたっての指示書	ペーパー		編集部	メンバーの津原さんへの取材・執筆のアドバイス

63	42	新聞記事				日本海新聞	1981.5.1 発刊5周年記念特集号14, 15p 座談会にスペース編集者として安藤参加
64	43	マック購入関係伝票	ペーパー				H3.3.6 マック購入保証伝票、H7.4.26 追加購入請求書(アップルコンピュータの記載あり)鳥取地域において、最初にマックを導入する
65	44	スペース関係新聞記事	コピー				発行の都度の新聞記事
66	45	スペース作成メモ帳等				編集部	手帳(デザイナー徳持耕一郎(当時編集部員)デザイン・制作)。販売店用値札。Tシャツプリント「スペース」ロゴ
67	46	国会図書館納本関係	冊子	印刷		国会図書館	1979 国会図書館 納本週報 納本掲載号
68	47	NHKTV「地方出版を語る」安藤出演関係	ペーパー				1981.10.24 放送キューシート。共演の伊藤栄氏文章。担当ディレクター石原結婚案内状
69	48	大宅壮一文庫からの寄贈依頼				財団法人大宅壮一文庫	依頼文。大宅文庫ニュース
70	49	編集等写真ポケットアルバム				編集部	編集風景。記念パーティー
71	50	1980.5.11 古本市関係資料	ペーパー/コピー			編集部	企画書。案内チラシ。新聞記事
72	51	1982.4.25 スペース臨時増刊号(非売品)	冊子			編集部	メンバーの古田・谷岡さんの結婚式で配布
73	52	スペース企画・スペース編集室屋内看板				編集部	
74	53	山陰放送出演記念色紙	色紙		1988	山陰放送	ラジオ「ニッカニッカさんいん」にスペース編集部が出演した記念
75	54	アングラ劇鳥取公演支援(鳥大生・山崎)			1980		公演チラシ、掲載新聞記事
76	55	いま!! 東松照明の世界・展	冊子	印刷、手書き	1984	とっとりオリジナルくらぶ	スペース編集室が、実質の事務所。パンフ。名簿。メモ。内部通信。チケット販売委託先
77	56	徳永進・掲載新聞	ペーパー/コピー				

78	57	定有堂関係資料	冊子、 ほか				スペース定期購読案内。「スペース」における「ブックレット」刊行の位置づけ。『定有』創刊号。定有堂 JOURNAL。リーフレット定有。濱崎先生・最後の授業・集合写真。掲載新聞記事
79	58	第7回ハンズ大賞作品集	書籍		1990	株式会社東急ハンズ	p15に大岩明彦・ハンズ・マインド賞受賞。大岩氏はスペースの表紙に作品を使用
80	59	拓け『文化の時代』！（シンポジウム）関係資料	冊子／ ペーパー		1981	シンポジウム実行委員会、新日本海新聞社	パンフ。チラシ。新聞記事。趣意書
81	60	田村紀雄『地域メディア時代』	書籍		1979	ダイヤモンド社	拓け『文化の時代』（シンポジウム）の講演者の著書
82	61	全国手弁当タウン誌会議（本の国体・ブックインとっとり87）	冊子／ カセット テープ		1988	「本の国体」実行委員会	記録集。パンフ。新聞記事。手弁当会議のテープ、テープ起こし。参加者資料。新聞記事
83	62	セミナー91（スペース主催）発表資料	ペーパー			セミナー91事務局	参加者発表資料
84	63	セミナー91（スペース主催）運営関係資料	ペーパー			セミナー91事務局	名簿。案内。収支決算。発表資料
85	64	タウン誌『スペース』とその書き手・徳永進～本とその資料展～関係資料（鳥取大学、鳥取県立図書館）	ペーパー		2019		開催趣旨。概要。新聞記事。感想ノート
86	65	スペース展使用 DVD	DVD		2019	実行員会	当日会場で流した徳永進・後藤繁栄インタビュー
87	66	NHK 鳥取「いろどり」スペース DVD	DVD		2019	NHK 鳥取放送局	2019.7.12 放送。安藤出演
88	67	たくみ21 2月例会案内	ペーパー／ 紙	印刷	2019	鳥取民藝美術館	安藤講師。「今、タウン誌『スペース』を語る—『スペース』と徳永進：本とその資料展 IN 鳥取大学—」
89	68	AJIMOTO NIKKAI（網師本日海）	冊子	印刷		網師本日海	『スペース』の主要執筆者：網師本日海の「書」の作品と文章。デザインは、主要メンバーの藤原一輝
90	69- 1	OTORI PRESS UMAX Vol.1 鵬通信	ペーパー	印刷	1991	諏訪酒造株式会社	編集：スペース企画、枝番一括

91	69- 2	OTORI PRESS UMAX Vol.2 鵬通信	ペーパー —	印刷	1991	諏訪酒 造株式 会社	編集:スペース企画
92	69- 3	OTORI PRESS UMAX Vol.3 鵬通信	ペーパー —	印刷	1992	諏訪酒 造株式 会社	編集:スペース企画
93	69- 4	OTORI PRESS UMAX Vol.4 鵬通信	ペーパー —	印刷	1993	諏訪酒 造株式 会社	編集:スペース企画
94	69- 5	OTORI PRESS UMAX Vol.5 鵬通信	ペーパー —	印刷	1994	諏訪酒 造株式 会社	編集:スペース企画
95	70- 1	OTORI PRESS UMAX NEXT Vol.1	ペーパー —	印刷	1994	諏訪酒 造株式 会社	編集:スペース企画、枝番一括
96	70- 2	OTORI PRESS UMAX NEXT Vol.2	ペーパー —	印刷	1995	諏訪酒 造株式 会社	編集:スペース企画
97	70- 3	OTORI PRESS UMAX NEXT Vol.3	ペーパー —	印刷	1996	諏訪酒 造株式 会社	編集:スペース企画
98	71	NHK 鳥取放送局 リ ニューアルオープン記 念事業イベント案内	冊子	印刷	1993	NHK 鳥 取放送 局	編集・企画:スペース企画
99	72	行政不服審査請求書 陳情書	ペーパー —		1994 1985	岩崎憲 —	『スペース 20 号』38.39p 記事「小学校 校区変更の奮戦てん末記」関連資料
100	73	ジゲおこし情報誌因 伯人—縮刷版—	冊子	印刷	1997	鳥取県 ジゲおこ し団体 連絡協 議会	編集・取材:スペース企画
101	74	ジゲおこし情報紙 因 伯人 0~30	ペーパー —	印刷	1992~ 1999	鳥取県 企画部 企画 課。同 地域振 興課。 鳥取県 ジゲおこ し団体 連絡協 議会	編集・取材:スペース企画
102	75	スペース展(鳥大、県 立図書館)展示材料			2019		ポスター。展示パネル

103	76-1	〔市民劇の会関係資料〕		一括					封筒一括、第1回「渴殺鳥取城のひとびと」関係、『スペース』重複本を含む。枝番一括
104	76-2	〔市民劇の会関係資料〕		一括					封筒一括、第2回「いなばの寝太郎」関係、当時の他の公演チラシ等。
105	76-3	〔市民劇の会関係資料〕		一括					封筒一括、第2回「いなばの寝太郎」関係、事務書類等
106	77-1	〔渴殺鳥取城のひとびと〕(脚本)		綴	印刷		〔須崎俊雄〕		標題に複数タイトル並記。安藤氏参加(勤十役)の市民劇脚本。安藤氏筆記の右肩「第2稿①」は修正の過程を示す。実演稿は鳥取大学教員に寄贈済み
107	77-2	渴殺鳥取城のひとびと(脚本)		綴	印刷		須崎俊雄		枝番1の修正稿
108	77-3	渴殺鳥取城(脚本)		綴	印刷		原作：須崎俊雄、脚色：砂川哲夫		上演台本、三幕四場、『劇作鳥取城主吉川経家』よりと明記
109	77-4	劇作鳥取城主吉川経家		書籍	印刷	1982	須崎俊雄	いなば出版会、スペース編集室	著者より安藤隆一氏への贈本、枝番3の原作
110	78	おんなのご情報誌コロンの第5号		書籍	印刷	1988		(おんなのご情報誌コロンの)編集部	1989年コロ編集室と共同で、『とっとり・くらしタウン情報誌まちなの本スペース』34号を発行する。その後、コロ編集・発行人の井上美香は、『スペース』の編集長も務める
111	79	鳥取県民読書週間連絡協議会		ペーパー					(第1回)事業計画関係資料
112	80	地域の情報化の方策—21世紀の国土構造への課題として—		書籍	印刷	1992	地方シンクタンク協議会編	総合研究開発機構	p187「文化創造装置としての活字メディア—金沢市でのタウン情報誌の役割—」(財団法人地域振興研究所)に関連記事、p747「鳥取県における地域文化の固有性と人的交流環境」(株式会社地域デザイン研究所)に関係記事
113	81	私都村資料							封筒一括、徳永進氏関係資料を含む
114	82	〔講義資料〕		一括					鳥取大学地域学部近代文学講義(岡村知子准教授担当)

